

要介護高齢者の生活の構成要素に関する一考察

下垣 光 ・ 大島 千帆 ・ 渡邊 祐紀 ・ 天野 由以
安 瓊伊 ・ 鄭 春姫 ・ 岸野 靖子 ・ 中島 健一

Consideration about the components of life of Elderly people who need long-term care

Hikaru Shimogaki ・ Chiho Oshima ・ Yuki Watanabe ・ Yui Amano
Kyungyee Ahn ・ Chunji Zheng ・ Yasuko Kishino ・ Kenichi Nakashima

Abstract: For the careworkers' practices, understand about the components of life of the Elderly people who need long-term care is needed. The purpose of this research is to make clear the components of life. This qualitative research result points out Life is not mere repetition of “food, clothing, sleep”, and suggested the importance to consider how to decide and act in daily living.

Key words: careworker, long-term care, components of life, daily living, qualitative research

介護福祉士の実践とは、要介護状態にある高齢者の生活の構成要素を理解することに基づくものであり、その「生活構成要素」と支援を明らかにすることを目的とする。質的調査から、生活は、単なる生活動作の衣食住の繰り返りではなく、行為の方法や行為から得られるものを含め考えることが示唆された。

キーワード: 介護福祉士、要介護状態、生活構成要素、生活動作、質的調査

I. はじめに

介護福祉学において、介護福祉士がおこなう専門性のある支援を、食事排泄などの身体介助に限定せず、幅広い「専門的知識や技術」による生活支援技術へと概念が強調されつつあり、それらは明確な根拠に基づき、実践の蓄積のうで深められ、要介護状態にある対象者の日常生活についての議論が展開されてきた^{1) 2) 3) 4) 5) 6) 7) 8) 9) 10) 11) 12) 13) 14) 15)}。要介護状態にある人の生活をどのように定義し、その支援を明らかにすることは、介護福祉学が専門性のある実践を柱とする学問であるかぎり避けることの出来ない課題であるといえよう。

要介護状態の人の生活の構成要素を明らかにすることを目的として、我が国の介護福祉の領域で要介護者の対象となる人が最も多い高齢者に焦点を当て、その対象者が多く生活をしている特別養護老人ホームの介護福祉士を対象としてのアンケート調査をおこない、介護の対象となる生活の構成要素を明らかにすることを目的として平成24年度調査をおこなった。調査では、全国47都道府県のWAMネットのリストから平成24年10月に確認された介護老人福祉施設6,350施設に対して調査票を郵送し、対象は当該施設に所属している介護福祉士とした。

実施期間は2012年11月初旬に配布し、11月末まで回収を行った。調査は、介護福祉士が支援するうえでの要介護高齢者にとっての生活の要素に含まれる要素を確認する内容とした。質問項目は、先行して行ったグループインタビューの結果¹⁶⁾により抽出されたカテゴリーおよび社会生活や生活科学における研究を参考にし、64項目作成した(表1)。なお調査に際しては、倫理的配慮として、回答はすべて無記名とし、研究内容、手続き、回答者のプライバシー保護について記載した用紙を同封し、回答をもって調査に同意したと見なした。また、日本社会事業大学研究倫理委員会の審査を受け、承認を得た。

表1 調査における質問項目

<p>花や写真を飾って自分の居場所を居心地良く整える 好きな時に好きな場所で過ごす 他者に文句を言ったり、口げんかをすることがある 手紙・電話・メールなどのやりとりをする 介護者によって技術の上下手がある事を受け入れつつ暮らす 自分の生活について、それまでの過去と比較し満足する 知識を増やすなど教養を高める 自分の心身の状態に応じた治療を希望する 年金以外の収入を得る方法（資産運用等）を持っている 住んでいる場所周辺の散歩に行く 生活の中で充実した気持ちになるものを持つ 充実した気持ちになるために、生活のスケジュールを立てる 他者・介護者の出す声や音を受け入れつつ暮らす 行きたい場所を決めて、泊りがけの旅行に行く 出来る範囲の家事など、自分のことをほぼ自分で行う ときに遠慮や我慢をしながら、嫌な状態でも暮らす 次に何かをするためのエネルギーを充電する 他者・介護者と関わり話すことを楽しむ機会を持つ 選挙に行くなどの政治活動を行う 心がときめく恋愛をする 生活にメリハリをつける これまでに築いた友人達との交流を続ける 他者と共に暮らすことで生じる出来事を受け入れる 住む場所により生活様式が変化することを受け入れる スポーツを観戦して楽しむ 他者やサービスのスケジュールに合わせる 生活の中に好奇心や意欲を持って暮らす 介護者の人数の影響を受けつつ暮らす 生活の中に選択肢がある 一部分でも、今の状態より質の高いものを求める 自分が決めた時間に睡眠を取る 生活の中で楽しみにしていることを大切にする 運動など身体を動かして楽しむ 気候（季節）に合わせて服を着替える</p>

生活の中で性的な満足を得る
 快適な環境で気持ちよく排泄する
 体を休めるために安静にする
 習慣として続けてきた自分なりの健康法を行う
 他者の心情などの状態に気づく
 親しい友人やグループとの関係を築く
 習い事や趣味の集まり、学習の場に行く
 今まで出来なかったことを出来るようにする
 お墓参りや法事、ミサ（礼拝）などに行く
 自己決定で考えながら行動する
 店頭、またはカタログなどで品物を購入する
 習い事や趣味の成果を披露する・教える
 家族や他者を気にかける・心配する
 家族や他者の身の回りの世話をする
 部屋の模様替えや整理整頓をする
 地域のお祭りなどのイベントに参加する
 パチンコ・麻雀・競馬などギャンブルを楽しむ
 今より力を伸ばし、新しいことに挑戦する
 公共交通機関を利用して外出する
 新聞・テレビ・雑誌などのマスメディアを利用する
 他者からの働きかけや干渉がある
 自分の心身の状態に応じたケアを希望する
 カーテンや家具など、好みのものを整える
 生活の中で少しの贅沢をする
 自分の状態にあった福祉用具を使う
 自分の状態にあったメガネ・補聴器を使う
 テレビやラジオで、好きな番組を視聴する
 生活の中でやりたいことや譲れないを持つ
 お祝いの席に参加する
 髪やひげの手入れ、お化粧などの身支度をする

調査票は、6,530施設に3通ずつ合計19,590配布し、4,283件が回収された。回収率は21.86%であった。回収された調査票の64項目について、特別養護老人ホームの要介護高齢者の生活の構成要素を明らかにするために、最尤法（プロマックス回転）により探索的因子分析をおこなった。因子数は、累積寄与率および因子の固有値から決定し6因子が抽出された（表2）。6因子はいずれも食事排泄入浴などの介助から考えられる要介護高齢者の生活よりもその高齢者の意欲などを背景とした主体的な活動がうかがえる内容であり、この因子からみた生活を支えてゆくには、どのような支援があるのか興味深いものといえる。本研究では、この生活要素に対する支援における技術についての予備的調査として特別養護老人ホームの介護福祉士にインタビュー調査をおこない、その記述から介護福祉士がおこなう要介護高齢者の生活支援について考察することを目的とする。なお本調査は、日本社会事業大学研究倫理委員会における審査を受け承認を得たものである。

表2 抽出された6因子

第1因子【メリハリのある快適な生活】
第2因子【新しいことに挑戦する前向きな生活】
第3因子【自分で決定する私的な生活】
第4因子【文化的・社会的な生活】
第5因子【他者の影響を受け入れる生活】
第6因子【道具・機器により幅の広がられた生活】

II. インタビュー調査

1. 調査の概要

対象は、先に挙げた全国調査において返送された調査票に追跡調査への協力の有無について、協力可能であるとの回答が確認された特別養護老人ホームのなかで生活の構成要素に対する支援について意見を聴取することに同意を得た介護福祉士の2名に対しておこなった。

協力を得た2名のプロフィールを以下に示す。

A氏：38歳。取得している資格は、介護福祉士。老人保健施設の介護職を6年経験し、その後病院にて4年間の介護職を経て、現在の法人で、特別養護老人ホームの介護職として3年間従事している。

B氏：年齢は39歳。取得している資格は、介護福祉士、社会福祉士（大学卒業時に試験にて取得）、介護支援専門員。主な介護職として経験は、ケア付き有料に6年介護職、現在の法人に就職し、4年前から2年間介護職し、現在は生活相談員。

2. 調査結果

インタビューにおいて聴取された意見について各因子別の内容を以下に示す。

(1) 第1因子

A：自分の好きな時間に起きて、好きな服を着て、自分の趣味をやったりとか。B：声をかけて、塗り絵もします。どの服を着ますと聞いたりしています。A：その日の状態にあわせて声をかけていっています。出来ないところあれば声かけしていくし、出来ないところを補っていくようにしています。B：一日のメリハリをつけていくし、季節のメリハリも大切にしていこうようにしています。そのために行事を企画していくようにしている。サンマをホームの外で焼いてみたりなどもしています。あと、なるべく朝起きたらカーテンをあげて、顔を洗うことをうながすようにしています。洗えない人には洗ってあげたり、口をゆすぐなどをしています。これをモーニングケアと呼んでいます。また食堂に集まって朝ご飯を食べるようにながすことを大切にしています。

あと自分から話し出すなど会話が自発的に出来る人は少ないが、利用者の要望や訴えは出来るだけ大事にしています。家族に連絡したいという人は、ユニットでも電話出来るが、下に降りてきてもらい、事務所の前の電話で連絡をするようにしてもらっています。

下に降りてきてもらうのは、そこで気分も変えてもらうという意図もあります。普段ユニットからあまり出ることも少ないから。同じようにレクリエーション活動をするときも、出来るだけセミパブリックスペースを活用し、さらにユニットを出て下に降りて来てもらい、場所を変えることも心がけています。そのときには事務所の方でも対応してもらったりしています。

B：利用者からの訴えが出てきたときに、出来るだけ後回しにしないことを心がけています。排泄についての訴えがあったときに、あとでトイレにつれていくからではなく、その場で対応することを意識しています。A：買いものに行きたいというときも、出来るだけ直ぐに対応するようにしています。まずは、何をしたいのか聞いてみます。やきそば食べたいという訴えの時には、今度いつなら準備出来る、となるべく具体的に対応しています。あと自分で出来るひとは、御飯のあとの洗い物をしてもらいます。我々介護職がするほうがはやいと思うけど。

(2) 第2因子

A：そういう気持を大切にしてもらって、何かやりたいという話を聞くようにしています。趣味の寄り合い会、コーラス体操、手芸工作と美容、生け花、癒しのためのセンサリールームなどに、きょうあるんですけどどうですかと誘うようにしています。音楽療法なんかは月に一回あり、好きな方は毎回です。昔は歌わなかったひとが、ここにきてソプラノ歌手みたいに歌えるようになった人もいます。この人の家族に言うことには、入所するまで家族のまえて歌ったことのない人だそうです。そういうように隠れていた能力を引き出せることがある。そのためには、介護する側に観察力とコミュニケーション力が必要です。例えば、今笑ったよね、という観察は、その人の今活動していることが好きそうな様子としてうかがいます。いやなときも表情や言葉から分かるし、利用者の気持ちを読み取る力が必要です。B：お茶を飲んでいるときなど、そのときの様子から、ああこれが好きなんだと分かるときもあります。A：介護する側の個人の能力も大事だと思う。職員自身の特技も必要。貼り絵とから歌とか。やきそばを作るときも、それが得意なものであれば利用者も満足度がちがう。

(3) 第3因子

B：こころときめく恋愛もあります。性的な満足だってあるでしょう。あと携帯電話がある人もいて、たまに電話しています。出来るだけその人の考えを尊重するようにしています。A：利用者には、納得してやってもらうにしています。B：その人の発言を尊重し、共感して認める。利用者同士のトラブルも、「だめだよ」とすぐ怒ったりしないで、双方の気持ちをうけとめて、「だめだよね」と仲裁するようにしている。

あと自宅へのショートステイもしている。そのときには看護婦さんが体調を確認し、薬の内服などの準備をして、自宅へのショートステイをしている。A：このホームは、家族の面会も多く、毎日来る人もいます。

(4) 第4因子

B：地元の夏祭りの御神輿がホームの玄関まで来ます。利用者もその夏祭りに参加するようにしています。そうすると利用者みんなが元気になるように思えます。

あとパチンコ台も買ってあります。A：お誕生日会は基本的にはユニットでやっています。あとお盆は、お盆棚をつくっています。本当はみなさんお墓参りに行きたいがほとんどその時

期に行くことは出来ないで。

習い事や趣味には出来るだけ声かけし、お連れをしています。新聞は各ユニットに配達されています。ユニットでは新聞取り係をきめて取りに行き、ユニット内のひとに配達するの係が決まっています。あと選挙もやりました。

ユニット担当職員でユニット会議で話し合うようにしています。会議ではその方の趣味とかどういったものが必要か。

(5) 第5因子

A：他者への不満や苦情は、「あの人はずっと声を出してうるさい」などの訴えをまず聞くようにしています。時にはそういう人をユニットから連れ出して、不快な思いをしている人と引き離すこともしています。B：ユニット内で仲の良いくない人がいるときには、食事の時のテーブルにおける座る椅子の位置をずらしたり、食事の時間帯や、寝る時間帯をずらしたりするなどの工夫はしています。A：落ち着くためには、お部屋で過ごしてもらう。下の事務所に寄ってもらい対応してもらったりすることもあります。こういうことは、現在サービスそのものが統一されていないことも多いのでユニット会議、カンファレンスでとりあげていくことが必要だ。

(6) 第6因子

A：補聴器は利用者が自分でもっているもので、こっちで準備してはいません。家族の方にもってきてもらいます。B：車イスのサイズがあわないと危ないこともあります。体の傾きのある人も多く、歩行器を使用している利用者は現在は少ない。あと押し車で歩ける人にはなるべく押ししてもらっています。あと相撲番組などを好きな人はみてもらったりしています。音楽をかけたりすることも多く、CDラジカセを持っている人も少なくないです。ユニット内で昭和の歌謡曲をかけたりすると口ずさんでいたりします。だいたい、みなさんの18番をわかっています。A：個人のCDやカセットは家族にもってきてもらったりしています。リビングのものはユニット費で購入している。

(7) 全体を通して

A：人と人、つまり利用者に対する調整力って大切です。ユニットケアは利用者ひとりひとり意識しないといけない。生活を出来るだけ、一人一人のあったものにしないと、従来型の特別養護老人ホームと同じになってしまう。B：一人一人にあった介護を実行しないといけない。家庭でやるような一連の生活の動作がありますよね。御飯をよそったりするなどの生活力、それを個人個人にあわせていくことが必要だと思います。

IV. 考察

特別養護老人ホームにおける要介護状態の高齢者は、一般的には食事や排泄などの自立が出来ず、移動も車いすの使用が必須となるようなイメージが強いものであり、生活のイメージは決して我々の日常生活と一致し難いものである。介護福祉士に求められる専門的知識や技術は、その生活において出来ない部分を「介助する」ことに特化している部分があるのも事実である。

本調査において用いた因子は、第1因子の「メリハリのある快適生活」、第2因子の「新しいことに挑戦する前向きな生活」、第3因子の「自分で決定する私的な生活」、第4因子の「文化的・社会的な生活」など潤いのある、意欲を刺激されるような日常生活をうかがわせる内容により構成されている。このような生活の構成要素に対する支援は対象者が限定されるものであり、身体介助に一杯である介護福祉の実践現場ではこのような支援に対する余裕もないなど、否定的な回答が予測されていた。

しかしメリハリのある生活は食事をベッドではなく食堂でとるなどの身近な環境調整から、行事やレクリエーション活動などのさまざまなアプローチによる支援などの奥行き深い支援がおこなわれていることが示唆された。特に音楽活動などのレクリエーションや趣味・習い事などは、特別養護老人ホームに入所することにより、「出来ないもの」と思われていた潜在化したその人の能力を引き出すという「前向きな」変化をもたらす可能性があるといえる。

また利用者の意思や自己決定を尊重することは、電話の使用などの機器の活用など幅広いアプローチのなかで保障されていることも示唆された。しかしこれらの支援の技術は、基本的には個々の利用者の特性、状態などに応じたものでなくてはならず、したがって個別性のある支援であるという点に特徴があるといえよう。利用者とのコミュニケーションや表情や行動についての観察、さらにそれらの情報をチームで共有するケア会議などの要素が支援技術として重要な位置を占めていると考えられる。

インタビューでは協力を得た特別養護老人ホームそのもの行事や支援方針などが、支援の特徴に影響をしており、さらに協力した介護福祉士の経験や技量にも左右されたものでもある。今後インタビューによる質的なデータを収集し、さらにホームの支援方針との分析を重ねることにより、介護福祉学における生活支援に関する研究を深めていきたい、

なお本研究は、平成26年度日本社会事業大学共同研究「介護福祉学の構築」の一部としておこなったものである。

注・引用文献

-
- 1) 本名靖：エンサイクロペディア社会福祉学（岡本民夫、田端光美、濱野一郎ほか編）、734-735、中央法規出版、東京（2007）。
 - 2) 井上千津子：「生活福祉学」の構築に向けて。京都女子大学生生活福祉学科紀要、1:9-15（2005）
 - 3) 金井一薫：介護展開における生活のとらえ方（一番ヶ瀬康子監修、日本介護福祉学会編）シリーズ・介護福祉第1巻；新・介護福祉学とは何か、94、ミネルヴァ書房、東京、（2000）
 - 4) 金井一薫：介護展開における生活のとらえ方（一番ヶ瀬康子監修、日本介護福祉学会編）シリーズ・介護福祉第1巻；新・介護福祉学とは何か、94、ミネルヴァ書房、東京、（2000）
p97
 - 5) 井上千津子：「介護福祉学」の構築に向けてーロマンから科学へー。介護福祉学、17(2)：

- 182-187 (2010).
- 6) 是枝祥子:「介護福祉学」の構築に向けてー実践で培ってきたことを基盤にー. 介護福祉学, 18(1): 65-70 (2011).
 - 7) 鈴木聖子:「介護福祉学」の構築に向けてーケア論からの考察ー. 介護福祉学, 18(2): 167-172 (2011).
 - 8) 峯尾武巳:「介護福祉学」の構築に向けてー介護福祉学への研究ノートー. 介護福祉学, 19(1): 101-107 (2012).
 - 9) 中西純子:「日常生活行動」の概念分析. 愛媛県立医療技術大学紀要, 1: 49-56 (2004).
 - 10) 小林利行, 諸藤絵美, 渡辺祥子:日本人の生活時間 2010 ～減少を続ける睡眠時間, 増える男性の家事～. 放送研究と調査, 2011年4月号: 2-21 (2011).
 - 11) 総務省:平成23年度社会生活基本調査. <http://www.stat.go.jp/data/shakai/2011/> (2013年3月26日閲覧).
 - 12) 金津春江, 川井太加子:第1章第1節生活の考え方. (介護福祉士養成講座編集委員会編) 新・介護福祉士養成講座 第3巻; 介護の基本 I, 2-3, 中央法規出版, 東京 (2010)
 - 13) 鈴木聖子:「介護福祉学」の構築に向けてーケア論からの考察ー. 介護福祉学, 18(2): 167-172 (2011).
 - 14) 瀧波順子「介護福祉学」の構築に向けてー先駆者が紡いだ介護福祉学の歴史を顧みるー. 介護福祉学, 19(2): 180-186 (2012)
 - 15) 渡辺裕美「介護福祉学」の構築に向けてー集団処遇の業務中心介護から個別の本人中心介護への転換ー. 介護福祉学, 20(1): 89-95 (2013)
 - 16) 渡邊祐紀他:要介護状態にある人の「生活構成要素」に関する研究:介護福祉士に対するグループインタビューに基づいて, 介護福祉学, 20(2): 117-125 (2013)